

吾妻町の文化財 7

# 弘法原遺跡

1983

長崎県吾妻町教育委員会





## 発刊にあたって

吾妻町は島原半島の入口に位置し、往古より、かなりの人々が定住して来た所であります。それは町内一円から、縄文時代より弥生時代の土器片や、石器等が数多く発見されていることからも判ります。

特に今回調査された弘法原一帯は、海拔200m位の処にあり、早くから土器片や、石斧、やじり等が農作業中に、或いは散策中に発見されている所がありました。

たまたま、昭和55年頃その一帯に、肉用牛集約生産基地育成事業に依って、畜舎等が建設されることになりましたので、関係農家の協力を得て、急拠県にお願いし、55年より3ヶ年に亘って、一帯の緊急調査が実施された次第であります。

その結果その一帯が、縄文早期の遺跡で、かなり広範囲に及んでいる事が確認され、しかも生活用具等も数多く出土しております、先住民達の生活の跡が偲ばれると共に、吾妻町の先史時代の貴重な遺跡であるとの報告を受けました。

その時代から数千年も経た今日の吾妻町を思う時、誠に感慨深いものを見ますが、この調査が、地域住民の地下埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、その保存に努めながら、更に住みやすい吾妻町の町づくりに、積極的に協力してくれるものと確信を致すものであります。

長期に亘ってのこの調査に、御辛労を相かけ、又数々の御教示を載きました県文化課の方々、特に田川、高野両先生に衷心より感謝を申上げる次第であります。

昭和58年3月31日

吾妻町長 吉田正俊



## ごあいさつ

本町は島原半島の北部に位置し、南東に秀峰雲仙・吾妻岳を仰ぎ北西は有明海に面し、丘陵部に畑地を吾妻岳より流れるいくつかの河川の流域や干拓事業により造成された多くの水田を有する農業に恵まれ、人の心の豊かなところであります。

このたび、当町にある弘法原遺跡に関する調査報告書を刊行することになりました。昭和55年より3ヶ年間に亘り緊急発掘調査がなされた結果、縄文時代早期更に縄文時代晚期の土器片やその他数多くの生活用具などが発掘され、数千年前の古代人の生活の姿が偲ばれ、物いわぬ遺跡が私たちに過去の歴史を想像させてくれると思えば文化財の大切さを深く感ずる次第であります。今回調査された弘法原遺跡発掘調査にあたり深いご理解と協力下さった千々石町の肉用牛集約生産基地育成事業に関係の皆様、ならびに3ヶ年の長い間本調査を担当ご指導いただきました県文化課の皆様のご苦労に対し、深甚の謝意を表する次第であります。

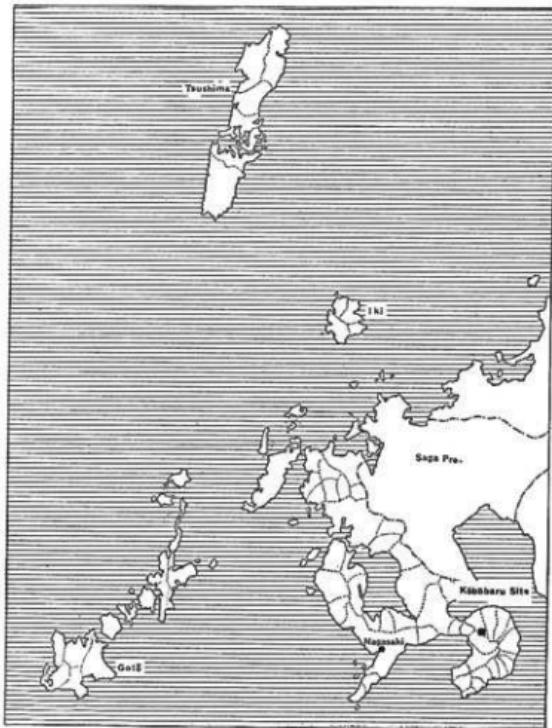
尚、本書が文化財保護や学術研究の資として活用されればこれに勝る喜びはありません。

昭和58年3月31日

吾妻町教育委員会

教育長 岩崎角男

# 弘法原遺跡



## 例　　言

一 本書は、昭和55～57年度にかけて実施した内牛育成基地建設予定地にかかる緊急発掘調査報告書である。

二 調査は、国庫・県費の補助を得て吾妻町教育委員会が事業主体となり長崎県文化課が担当した。

三 本書は分担執筆し、各項の執筆者は本文目次の項に記した。その他石器の実測については、正林謙、安楽勉、町田利幸、片山巳賀子各氏の協力を、又土器の拓本には望月陽子、大沢加奈子の協力を得た。なお、調査時の写真は高野が、そして本書掲載 遺物写真は副島和明による。

四 石器実測図中で網がかかった剥離は後世の加撃によるもので、石器製作技術とはまったく関係ない。

五 遺物の科学分析の内、土器の熱ルミネッセンス測定結果については奈良教育大学市川米太先生から玉稿を得た。又土壤の花粉分析結果についてはパリノサーヴェイ（株）より巻末に附した報告を受けた。

六 本書関係遺物は、現在全て長崎県教育委員会文化課で保管している。

七 本書の編集責任は高野にある。

## 本文目次

	頁	執筆者
第1章 序説		
一 調査に至るまで	1	田川 雄
二 調査経過	2	高野晋司
三 遺跡の地理的歴史的環境	7	"
第2章 遺跡の調査		
一 遺跡の位置	12	高野晋司
二 遺構		
(1) 焼石状遺構	15	福田一志
(2) 焼土	15	"
(3) 性格不明ピット	15	"
三 遺物の出土状況	19	"
四 出土遺物		
(1) 土器	23	高野晋司
(2) 石器		
a. 各種石器	83	田川 雄
b. 石難	92	村川逸朗
第3章 考察		
一 弘法原出土の土器について	135	高野晋司
二 土器接合状態について	142	福田一志
三 弘法原出土の石器について	146	田川 雄
四 石難について	148	村川逸朗
五 まとめ	150	高野晋司
第4章 科学分析による遺跡の古環境について		
一 弘法原遺跡出土土器の熱ルミネッセンス年代測定結果の報告	153	市川米太
二 長崎県吾妻町弘法原遺跡試料花粉分析結果報告	155	パリノサ ーベイ

## 挿 図 目 次

	頁
Fig. 1 調査区位置図 (1/900).....	5
Fig. 2 町内遺跡分布図.....	9
Fig. 3 遺跡附近表層地質図（長崎県土地分類基本調査1973『肥前小浜』より転載）	11
Fig. 4 土層断面位置図.....	12
Fig. 5 土層図 (1/40) .....	13
Fig. 6 集石状造構①.....	16
Fig. 7 集石状造構②.....	17
Fig. 8 焼土ピット位置図.....	18
Fig. 9 土器出土深度.....	20
Fig. 10 土器出土深度.....	21
Fig. 11 I-1類（山形文）出土状況.....	27
Fig. 12 I-1類（II A）土器実測図① (1/2).....	28
Fig. 13 I-1類（II A）土器実測図② (1/2).....	29
Fig. 14 I-1類（II A）土器実測図③ (1/2).....	30
Fig. 15 I-1類（II A）土器実測図 (1/2).....	31
Fig. 16 I-1類（II A）土器実測図⑤ (1/2).....	32
Fig. 17 I-1類（II A）土器実測図⑥ (1/2).....	33
Fig. 18 I-1類（II B）土器実測図① (1/2).....	34
Fig. 19 I-1類（II B）土器実測図② (1/2).....	35
Fig. 20 I-1類（II C）土器実測図① (1/2).....	36
Fig. 21 I-1類（II C）土器実測図② (1/2).....	37
Fig. 22 I-1類（II D）土器実測図① (1/2).....	38
Fig. 23 I-1類（II D）土器実測図② (1/2).....	39
Fig. 24 I-1類（II E）土器実測図 (1/2).....	40
Fig. 25 I-1類（III A）土器実測図① (1/2).....	41
Fig. 26 I-1類（III A）土器実測図② (1/2).....	42
Fig. 27 I-1類（III A・III C・III D）土器実測図 (1/2).....	43
Fig. 28 I-1類（III E・III F）土器実測図 (1/2).....	44
Fig. 29 I-1類（II A）土器実測図① (1/2).....	45
Fig. 30 I-1類（II A）土器実測図② (1/2).....	46
Fig. 31 I-1類（II B）土器実測図 (1/2).....	47

Fig. 32	I-1類(ⅡD)土器実測図(1/2).....	48
Fig. 33	I-1類(ⅡD・ⅡE)土器実測図(1/3).....	49
Fig. 34	I-1類(ⅡD)土器実測図(1/4).....	50
Fig. 35	I-1類底辺部実測図(1/2).....	51
Fig. 36	I-1類底辺部実測図(1/2).....	52
Fig. 37	I-1類底部実測図①(1/2).....	53
Fig. 38	I-1類底部実測図②(1/2).....	55
Fig. 39	I-1類底部実測図③(1/2).....	56
Fig. 40	I-2類(椭円文)類土器分布図.....	57
Fig. 41	I-2類土器実測図①(1/2).....	58
Fig. 42	I-2類土器実測図②(1/2).....	59
Fig. 43	I-2類土器実測図③(1/2).....	60
Fig. 44	I-2類土器実測図④(1/2).....	61
Fig. 45	I-3類格子目土器分布図.....	62
Fig. 46	I-3類土器実測図①(1/2).....	63
Fig. 47	I-3類土器実測図②(1/2).....	64
Fig. 48	I-3類土器実測図③(1/2).....	65
Fig. 49	I-3類土器実測図④(1/2).....	66
Fig. 50	II類無文土器分布図.....	67
Fig. 51	II・III類土器実測図(1/2).....	68
Fig. 52	III類土器分布図.....	69
Fig. 53	IV類土器分布図.....	69
Fig. 54	V類土器分布図.....	70
Fig. 55	IV・V類土器実測図(1/2).....	71
Fig. 56	VI類土器分布図.....	72
Fig. 57	VI類土器実測図①(1/2).....	73
Fig. 58	VI類土器実測図②(1/2).....	74
Fig. 59	出土石器平面分布図.....	84
Fig. 60	石器平面分布図(ナイフ形石器・彫器・楔形石器).....	84
Fig. 61	石器平面分布図(ポイント).....	85
Fig. 62	石器平面分布図(石錐).....	85
Fig. 63	ナイフ・ドリル・グレイバー・楔形石器実測図(2/3).....	86
Fig. 64	石器平面分布図(石匙).....	87
Fig. 65	石匙実測図(2/3).....	88

Fig. 66	石器平面分布図（スクレイパー）	89
Fig. 67	スクレイパー実測図①（2/3）	90
Fig. 68	スクレイパー実測図②（2/3）	91
Fig. 69	スクレイパー実測図③（1/2）	92
Fig. 70	石器平面分布図（石鎌）	92
Fig. 71	石鎌実測図①（2/3）	93
Fig. 72	石鎌実測図②（2/3）	94
Fig. 73	石鎌実測図③（2/3）	95
Fig. 74	石鎌実測図④（2/3）	96
Fig. 75	石鎌実測図⑤（2/3）	97
Fig. 76	石鎌計測法模式図	98
Fig. 77	石鎌破損部位別一覧表	98
Fig. 78	形態別一覧表	99
Fig. 79	石材別利用状況	100
Fig. 80	長幅比グラフ	101
Fig. 81	幅・長さグラフ	101
Fig. 82	厚さグラフ	101
Fig. 83	重さグラフ	101
Fig. 84	角度グラフ	102
Fig. 85	長幅比・挟り幅/深さグラフ	102
Fig. 86	II・III層におけるI～III類の割合	103
Fig. 87	石器平面分布図（石核）	106
Fig. 88	石核実測図①（2/3）	107
Fig. 89	石核実測図②（2/3）	108
Fig. 90	石核実測図③（1/2）	109
Fig. 91	石器平面分布図（石核・剝片）	110
Fig. 92	石器平面分布図（石核・碎片）	110
Fig. 93	調整痕および使用痕のある剝片（2/3）	111
Fig. 94	剝片実測図①（2/3）	112
Fig. 95	剝片実測図②（2/3）	113
Fig. 96	剝片実測図③（2/3）	114
Fig. 97	石器平面分布図（磨製石斧）	115
Fig. 98	磨製石斧実測図①（2/3）	116
Fig. 99	磨製石斧実測図②（2/3）	117

## 表 目 次

	頁
Tab. 1 出土土器統計表①	24
Tab. 2 出土土器統計表②	25
Tab. 3 出土土器統計表③	26
Tab. 4 土器觀察表①	75
Tab. 5 土器觀察表②	76
Tab. 6 土器觀察表③	77
Tab. 7 土器觀察表④	78
Tab. 8 土器觀察表⑤	79
Tab. 9 土器觀察表⑥	80
Tab. 10 土器觀察表⑦	81
Tab. 11 土器觀察表⑧	82
Tab. 12 出土石器組成表	89
Tab. 13 石鐵計測表①	104
Tab. 14 石鐵計測表②	105
Tab. 15 石鐵計測表③	106
Tab. 16 磨石・凹石・敲石・砥石・石皿計測表①	132
Tab. 17 磨石・凹石・敲石・砥石・石皿計測表②	133
Tab. 18 島内押型文土器出土地名表①	140
Tab. 19 島内押型文土器出土地名表②	141
Tab. 20 資料表	155
Tab. 21 花粉分析結果一覽表	158

Fig. 100	磨製石斧・石斧実測図（2/3）	118
Fig. 101	石斧実測図（2/3）	119
Fig. 102	石器平面分布図（磨石・石皿）	120
Fig. 103	磨石実測図①（1/3）	121
Fig. 104	磨石②・凹石①実測図（1/3）	122
Fig. 105	石器平面分布図（敲石・凹石・ハンマーストーン）	123
Fig. 106	凹石実測図②（1/3）	124
Fig. 107	凹石実測図③（1/3）	125
Fig. 108	凹石実測図④（1/3）	126
Fig. 109	凹石⑥・磨石・敲石・その他の石器①実測図（1/3）	127
Fig. 110	その他の石器実測図②（1/3）	128
Fig. 111	砥石・石皿①実測図（1/3）	129
Fig. 112	石皿実測図②（1/6）	130
Fig. 113	石器平面分布図（砥石・石皿）	131
Fig. 114	石材別分布図（チャート・玉髓）	131
Fig. 115	山形口縁部口径別数量図	135
Fig. 116	山形底部底径別数量図	135
Fig. 117	押形文原体値数量図	136
Fig. 118	押形文土器出土地名表	139
Fig. 119	土器接合資料平面分布	143
Fig. 120	石器分布図	147
Fig. 121	石器出土量図	147
Fig. 122	磨石・凹石計測表	148
Fig. 123	遺物出土密集図	151
Fig. 124	A・63土器の熱発光曲線	153
Fig. 125	A・387土器の熱発光曲線	153
Fig. 126	主要花粉胞子化石ダイヤグラム	156

## 図版目次

- PL. 1 調査区全景・遺跡遠景
- PL. 2 第1次調査前・第1次調査後
- PL. 3 遺物出土状況（第1次）・遺物出土状況（第2次）
- PL. 4 調査風景（第1次）・調査風景（第2次）
- PL. 5 調査風景（第1次）・D区調査後（第1次）
- PL. 6 C区東壁（第1次）・C区南壁（第1次）
- PL. 7 P-1区東壁・Q-1区南壁
- PL. 8 P-6区東壁・Q-5区東壁
- PL. 9 M-1区東壁・N-1区東壁
- PL. 10 P-4区東壁・R-4区東壁
- PL. 11 1号集石状造構（発掘前）・1号集石状造構（発掘後）
- PL. 12 焼土出土状況（G-1区）・2号集石状造構
- PL. 13 土器出土状況
- PL. 14 土器出土状況
- PL. 15 土器出土状況
- PL. 16 土器出土状況
- PL. 17 土器出土状況
- PL. 18 土器出土状況
- PL. 19 土器出土状況
- PL. 20 土器出土状況
- PL. 21 土器出土状況
- PL. 22 石器出土状況
- PL. 23 石器出土状況
- PL. 24 石器出土状況
- PL. 25 石器出土状況
- PL. 26 土器①(1/2)
- PL. 27 土器②(1/2)
- PL. 28 土器③(1/2)
- PL. 29 土器④(1/2)
- PL. 30 土器⑤(1/2)
- PL. 31 土器⑥(1/2)
- PL. 32 土器⑦(1/2)

- PL. 33 土器⑧ (1/2)  
PL. 34 土器⑨ (1/2)  
PL. 35 土器⑩ (1/2)  
PL. 36 土器⑪ (1/2)  
PL. 37 土器⑫ (1/2)  
PL. 38 土器⑬ (1/2)  
PL. 39 土器⑭ (1/2)  
PL. 40 土器⑮ (1/2)  
PL. 41 土器⑯ (1/2)  
PL. 42 土器⑰ (1/2)  
PL. 43 土器⑱ (1/2)  
PL. 44 土器⑲ (1/2)  
PL. 45 土器⑳ (1/2)  
PL. 46 土器㉑ (1/2)  
PL. 47 土器㉒ (1/2)  
PL. 48 土器㉓ (1/2)  
PL. 49 土器㉔ (1/2)  
PL. 50 土器㉕ (1/2)  
PL. 51 土器㉖ (1/2)  
PL. 52 土器㉗ (1/2)  
PL. 53 土器㉘ (1/2)  
PL. 54 土器㉙ (1/2)  
PL. 55 土器㉚ (1/2)  
PL. 56 土器㉛ (1/2)  
PL. 57 土器㉜ (1/2) ・土器断面・異種原体施文例  
PL. 58 格子目とその陽像・楕円文とその陽像・撚糸文とその陽像  
PL. 59 各種山形文  
PL. 60 各種格子目文・施文の新旧例・葉脈圧痕底面  
PL. 61 ピット出土状況  
PL. 62 ナイフ形石器・ドリル・グレイバー・石錐・ポイント (表) (1/1)  
PL. 63 ナイフ形石器・ドリル・グレイバー・石錐・ポイント (裏) (1/1)  
PL. 64 石匙 (表) (1/1)  
PL. 65 石匙 (裏) (1/1)  
PL. 66 スクレイバー① (表) (1/1)

- PL. 67 スクレイパー①(裏)(1/1)
- PL. 68 スクレイパー②(表)(1/1)
- PL. 69 スクレイパー③(裏)(1/1)
- PL. 70 石鏃①(表)(1/1)
- PL. 71 石鏃①(裏)(1/1)
- PL. 72 石鏃②(表)(1/1)
- PL. 73 石鏃②(裏)(1/1)
- PL. 74 石鏃③(表)(1/1)
- PL. 75 石鏃③(裏)(1/1)
- PL. 76 石鏃④(表)(1/1)
- PL. 77 石鏃④(裏)(1/1)
- PL. 78 石鏃⑤(表)(1/1)
- PL. 79 石鏃⑥(裏)(1/1)
- PL. 80 石核①(表)(1/1)
- PL. 81 石核①(裏)(1/1)
- PL. 82 石核②(裏)(1/1)
- PL. 83 石核②(裏)(1/1)
- PL. 84 使用痕ある剝片(表)(1/1)
- PL. 85 使用痕ある剝片(裏)(1/1)
- PL. 86 チャート(石核・剝片)(表)(1/1)
- PL. 87 チャート(石核・剝片)(裏)(1/1)
- PL. 88 剝片①(表)(1/1)
- PL. 89 剝片①(裏)(1/1)
- PL. 90 剝片②(表・裏)(1/1)
- PL. 91 不明石器・接合資料(剝片)(1/1)
- PL. 92 磨製石斧①(表)(1/1)
- PL. 93 磨製石斧①(裏)(1/1)
- PL. 94 磨製石斧②(表)(1/1)
- PL. 95 磨製石斧②(裏)(1/1)
- PL. 96 磨石①
- PL. 97 磨石②
- PL. 98 磨石③
- PL. 99 砕石・石皿



発見当時（昭40年頃）の遺跡

# 第1章 序 章

## 一 調査に至るまで

国道251号線に並行して標高約200m附近を開拓道路とよばれる県道183号線が島原半島を周回している。この道路沿いは戦後の入植により開墾された地域であり集落が散在する。

礎石原遺跡、百花台遺跡等がそうであるように、弘法原遺跡も、これらの開墾により世に送り出された遺跡のひとつである。吾妻町内の小・中学校の遠足は、そのほとんどが対象地を「牧野」としており、川床小学校の場合も例外ではない。弘法原遺跡はその牧野に隣接している。

昭和46年5月1日、隣町である瑞穂町教育長橋林正信氏（当時）は県文化課に表揚遺物を持参された。遺物は土器と石器であり、土器は縄文時代早期の山形押型文、楕円押型文、格子目押型文、無文等であり、石器は石錐、尖頭状石器、磨製石斧等であった。詳細を伺うと、同氏夫人が川床小学校で教鞭をとっておられ、遠足の際、開墾地から採集されたものであり、同校で保管しているということであった。

事態を重要視した文化課は、遺跡の保全を吾妻町教育委員会に依頼すると同時に、土地所有者・関係機関との協議を行うこととし、同年6月22日職員を派遣し現地踏査を実施した。また、並行して遺跡発見届等の事務的手段を行った。

現地踏査の結果、同遺跡は縄文時代早期の単純遺跡であり、その包蔵内容、遺跡の規模からして、本県における同期の重要な遺跡のひとつとしてノミネートされた。

また、土地所有者・関係機関には、遺跡の重要度、文化財の意義・保存の趣旨等についてレクチャーしていく。

この後、遺跡地図等に掲載したりして周知の徹底をはかり、約9年間は無風状態で過ぎてゆくのである。あたかも万全の策をとったかにみえた同遺跡も10年目に異変が起きた。

昭和55年3月17日、吉田吾妻町長は遺跡附近を通行して現状変更に気づかれ、町教育委員会から県文化課へ異変が通報された。県文化課は同年4月24日職員を派遣し現地踏査を実施すると同時に、現状変更区域内において遺物包含状況を把握すべく一部試掘調査を行った。

現状変更区域内には、肉牛肥育事業による畜舎建設が行われることが判明したので、5月20日県文化課と町教育委員会は、その対策について協議した。その後、事業主と計画変更について数次の協議を重ねたが交渉は決裂し、工事前に緊急発掘調査を実施し、記録保存を図ることとした。昭和55年6月24日付けで事業主より文化庁へ発掘届が提出された。

緊急発掘調査は町教育委員会が事業主体、県文化課が調査主体となって、国庫補助を得て実施することとし、事業の年次計画に基づき、昭和55年7月28日～8月29日を第1次調査として

スタートすることになった。爾来昭和56年度、57年度と3次にわたり緊急発掘調査を実施したのである。

## 二 調 査 経 過

内牛育成基地建設計画を持つ事業者と、文化財関係者との保存の為の協議は不調に終った為建設にかかる区域については事前に緊急調査の止むなきに至った。只、建設は3ヶ年にわたることから、調査もそれに合わせて行うこととし、昭和55年より3ヶ年継続で実施することとなった。

### 第1次調査（昭和55年7月28日～9月3日）

調査区設定にあたっては、建築物の位置を念頭において、東西ラインは、E-2区とL-2区の南壁の延長線を基本軸とした。なお、調査は建物の面積に合わせて限定した為に、A、B、C区は $5 \times 7\text{ m}$ 、D区は $7 \times 7\text{ m}$ 、そしてE区より西側は基本的に $5 \times 5\text{ m}$ の方眼になるなど不規則なものになっている。(Fig. 1) 調査面積は $430\text{ m}^2$ で、実質30日間実施した。

調査は、漸次西側より掘り始めた。その結果、A・B両区ではそれぞれ1グリッドで約400点の遺物が出土するのに比して、東側J区に至っては遺物・遺構共に全く見受けられないなど、西側に厚く、東側に稀薄である遺跡の状況が確認されることとなった。なお、北側区域については、すでに開墾の折の重機類の掘削によって包含層は消失している。

### 第2次調査（昭和56年7月27日～10月17日）

前回の調査は、建築予定地面積に限定して実施した軒であるが、調査終了後の工事の進捗状況は予定を上回る規模のものであり、未調査区域を含めて破壊される不手際が生じた。

この為、今次の調査では、建物面積に限定せず、一次調査で推測された遺跡の範囲全面について可能な限り実施することとした。調査区は、一次調査の際残しておいた東西の基本線を軸として、 $5 \times 5\text{ m}$ の方眼を設定し西側より漸次発掘を開始した。この結果、遺物の出土状況はやはり西北側に厚く、南東側に稀薄である事が判った。又、南限については、0-7区からV-1区にかけての楕円のカーブが想定される。調査面積は $1,130\text{ m}^2$ で、実質57日間の調査である。

### 第3次調査（昭和57年8月20日～8月27日）

調査区は、1次・2次調査区の南側上方60m、標高228mの地点である。これまでの調査で把握した遺跡の範囲外であるが、同地点周辺より、やはり同種の土器片を散見し得るところから、確認の意味で40mの小グリッドを設定して精査を行った。結果は、1、2個の土器片の出土はあったものの、土層自体擾乱気味であり、整層状況下ではなかった。しかし、一部に包含層らしき黄褐色土層も見受けられることから、将来、下方の遺跡とは異なる地点の遺跡として注意を要しよう。

調査関係者

第1次調査（昭和55年7月28日～9月13日）

調査総括 岩崎角男 吾妻町教育委員会教育長

松田安隆 吾妻町教育委員会教育次長

藤田 徹 " 社会教育係長（現吾妻町住民課長）

町田 幸 "

境川秀生 "

渋 敏子 "

濱口春喜 "

伊藤なぎさ "

調査担当 田川 雄 長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事

高野晋司 " 文化財保護主事

平野敏和 " 文化財調査員（現外海町歴史民俗資料館学芸員）

福田一志 " 文化財調査員

調査協力 伴耕一朗，本多浩樹，辰田秀樹，岩本勝，吉田俊樹，黒田昭和，岩本好美，手永弘，荒平久年，町田義彦，宮原房寿，内田義浩，香月輝則，立石雅昭，宮崎定子，島田恵美子，宮浦千恵子，堀田末喜，岩本百代，岩木富枝，岩本三枝，平林伝，手水サツキ，黒田ミサエ，島田和代，脇山マツヨ，園田フエ，宮崎アサノ，宮田孝子，宮崎スミノ，高橋サヨコ，馬場ツタエ，長谷川リツ子，江口優子，村田ハリヨ，手水綾子，馬場キヨ，岩崎マサコ，山口都，高橋ミツコ，古藤美穂

第2次調査（昭和56年7月27日～9月5日）

調査総括 岩崎角男 吾妻町教育委員会教育長

松田安隆 " 教育次長

藤田 徹 " 社会教育係長（現吾妻町住民課長）

町田 幸 "

境川秀生 "

渋 敏子 "

濱口春喜 "

伊藤なぎさ "

調査担当 田川 雄 長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事

高野晋司 " 文化財保護主事

福田一志 " 文化財調査員

村川逸朗 " "

調査協力 伴耕一朗，伴真介，本多浩樹，辰田秀樹，尾畠亮，町田鏡樹，岩本初義，松田新

吾，中尾芳，中尾康明，笠田博幸，町田義彦，町田正之，宮崎良彦，高橋幸秀，永田秀夫，柿田克樹，島田豊，町田國弘，本田博幸，水田俊一郎，田中清子，手水涼子，宮田孝子，荒平ヤエコ，長尾千恵子，町田シゲコ，宮田チユ，園田フエ，宮崎ヒデコ，高橋サエコ，宮崎アサノ，川原秀子，黒田ヤチユ，岩永薫美枝，臨山アヤ子，手水幸代，中尾ヒツエ，中尾テルヨ，中尾ユリコ，中尾チヨキ，谷川せつ子，脇力マツヨ，臨山キサエ，高橋ミツ子，松田フミエ，手水ツキノ，手水マツヨ，手水マサコ，岩本ツジコ，岩本ミツエ，黒田タツコ，岩永ノリエ，岩崎勝子

第3次調査（昭和57年8月20日～8月27日）

調査総括 岩崎角男 吾妻町教育委員会教育長

横田栄喜男 " 教育次長

荒木登志男 " 派遣社会教育主事

境川秀生 " 社会教育係長

町田幸子

山下律子

庄崎信生

濱口春喜

清水智子

調査担当 高野晋司 長崎県教育庁文化課文化財保護主事

村川逸朗 " 文化財調査員

調査協力 伴耕一朗，伴真介，本多浩樹，岩本初義，松田真吾，黒田ヤチユ，岩永ノリエ

内業協力 江川利子，村田幸子，有山弘美，津田美由紀，望月陽子，大沢加奈子，本田邦子，富田知江，園田山紀子，広川祐子，成瀬史子，三木久美恵

なお、3ヶ年にわたる調査に際しては、千々石内牛有限会社代表者奥野茂氏を始めとする社員の方々に種々御協力を賜わった。記して感謝申しあげたい。

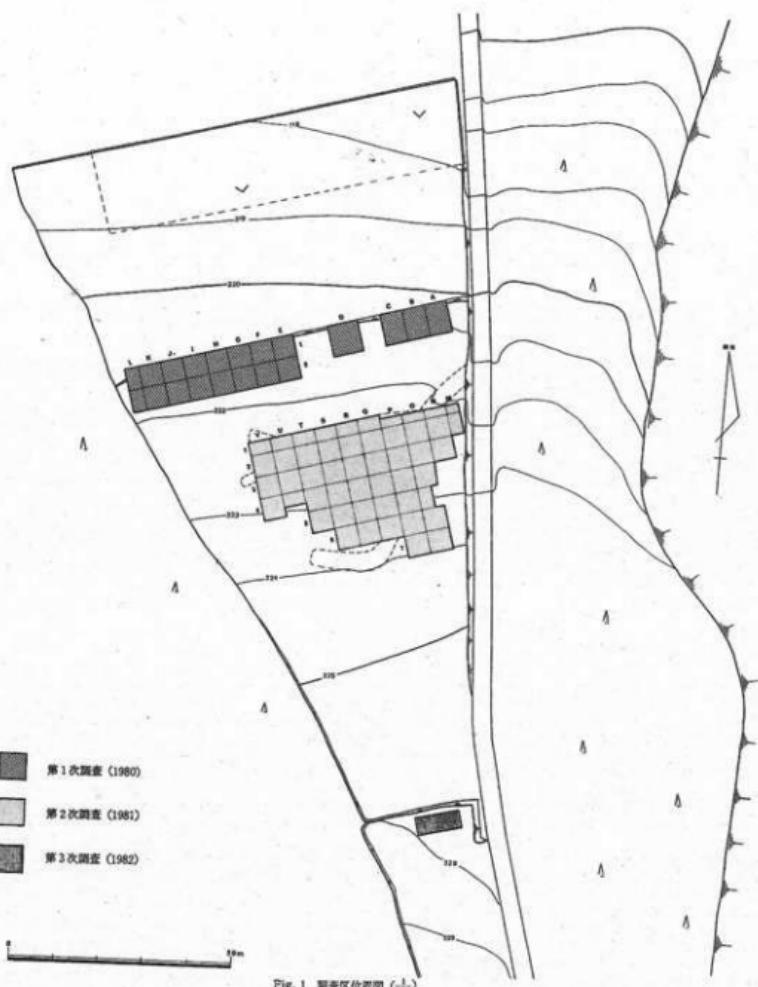


Fig. 1 調査区位置図 (1:10)



### 三 遺跡の地理的歴史的環境 (Fig. 2, 3)

遺跡は、南高来郡吾妻町栗林名字松尾に所在する。附近一帯が通称「弘法原」と呼ばれるのは、近くに祀ってある「弘法大師」の碑がその由来であるらしい。

島原半島中央部は、普賢岳(1,359m)、九千部岳(1,062m)などを主峰とする屹立した連山によって占拠される。この雲仙火山群を構成する火山の一つ、鉢巻山(638m)より派生した丘陵は、その傾斜は強く、標高200mラインまで一気に下る。以下一転してゆるやかな勾配に変わり、放射状に扇状地形を形成しながら北部有明海に没する。又、開析が進んだ幾筋もの古い谷は扇頂部附近まで及んで深い渓谷を構成する。遺跡末端直下には、その谷筋を流れる一条の小河川の源泉が知られており、現在でも枯渇することはないという。

一方、遺跡の南側上方約300mの至近距離には、落差60mを持つ千々石断層が東西に走って急崖を成す。

遺跡の立地は、このような扇頂部に近く、丘陵の傾斜角度が一転して緩慢になる分岐点附近にあたり、標高は220～225mを計る。当該地一帯は、北面するゆるやかな傾斜地であり、眼下には遙かに有明海を眺望する。

次に周辺遺跡を概観してみたい。

現在町内には22の遺跡が分布する。以下その概略を述べておく。

旧石器時代の遺物が出土するのは、現在のところ1の弘法原のみで、ナイフ形石器など数点が散見される。縄文時代の遺跡も明確な包含層を伴う遺跡は、やはり弘法原だけであり、他では、15で数点の押型文土器と晩期の組織痕土器が、そして17の西端部附近より晩期の資料が若干みられる程度にすぎない。かつては2の周辺の海岸段丘上より晩期資料が出土したとの報があるが、地点が不正確で判然としない。弥生時代遺物は、町内各所から発見の報はあるが、地点が何れも不明瞭である。現在遺物・遺構共に確認し得るのは、中熊台地及びその周辺からのものである。すなわち、15に於いて前期末～中期初頭に属する石棺墓と土塚墓が、そして川の西端にあたる部分から埴輪整備の工事中出土した中期～後期にかけての資料がそれである。古墳時代に入ると、遺跡の数は急激に増えて20遺跡を数える。その内訳は、前方後円墳3、円墳で横穴式石室のもの4、石棺形態のもの6、そして形状不明が8遺跡である。もっとも、この内すでに消失しているものも5遺跡を数えるから、現存するのは15遺跡である。

これらの数字は、県内では密な方であり、特に前方後円墳が3基集中するのはこの地区のみである。特に古墳古墳は、報によれば径100mを越すものとされ、それが事実であれば、県下で最大クラスの規模をもつことになる。これら、古墳密集の背景には、当然ながら余剰生産の事実があった軒で、それは現国道以南に展開する、古い広域にわたる海岸沖積地の最大限の利用によるものに他ならない。現在なお、同地区が島原半島でも卓越した水田穀倉地帯である実績は、その萌芽がすでにこの頃あらわれていた事の証左であろう。

吾妻町は、旧山田村に属し、延喜式兵部省に言う「山田駅」の在所に比定されており、大宰府から野鳥に到る西海道西路の駅路として、古代から重要な位置を占めている。

このような歴史的環境は又、古墳時代以降に顯著な農地の拡大利用の実績と合わせて、後世に於ける条里施行にスムーズに移行させ得る要素を有していたものと思われる。

現在、本県には5ヶ所の条里遺構が指摘されているが、島原半島に於いては、この<sup>註4</sup>17が唯一の例である。

註1 当該地図作成には、下記の資料を参考とし、遺跡内容についても同書に負うところが大きい。

a. 古田正隆、上田俊之、吉田安弘、1978「杉山古墳調査報告書」吾妻町の文化財3、吾妻町教育委員会、p. 1, p. 50~53

b. 古田正隆、1979「吾妻町中熊合地調査報告」吾妻町の文化財4、吾妻町教育委員会

c. 古田正隆、1982「山田地区県営場整備工事に伴う埋蔵文化財の調査概報」吾妻町の文化財5、吾妻町教育委員会・島原振興局土地改良課

註2 長崎県教育委員会、1962「長崎県遺跡地名表」長崎県文化財調査報告書第1集

註3 註1a, p. 52

註4 土居利男、1965「多良山麓研究」p. 44~46 詳細は同書を参照されたい



遺跡からみた鉢巻山

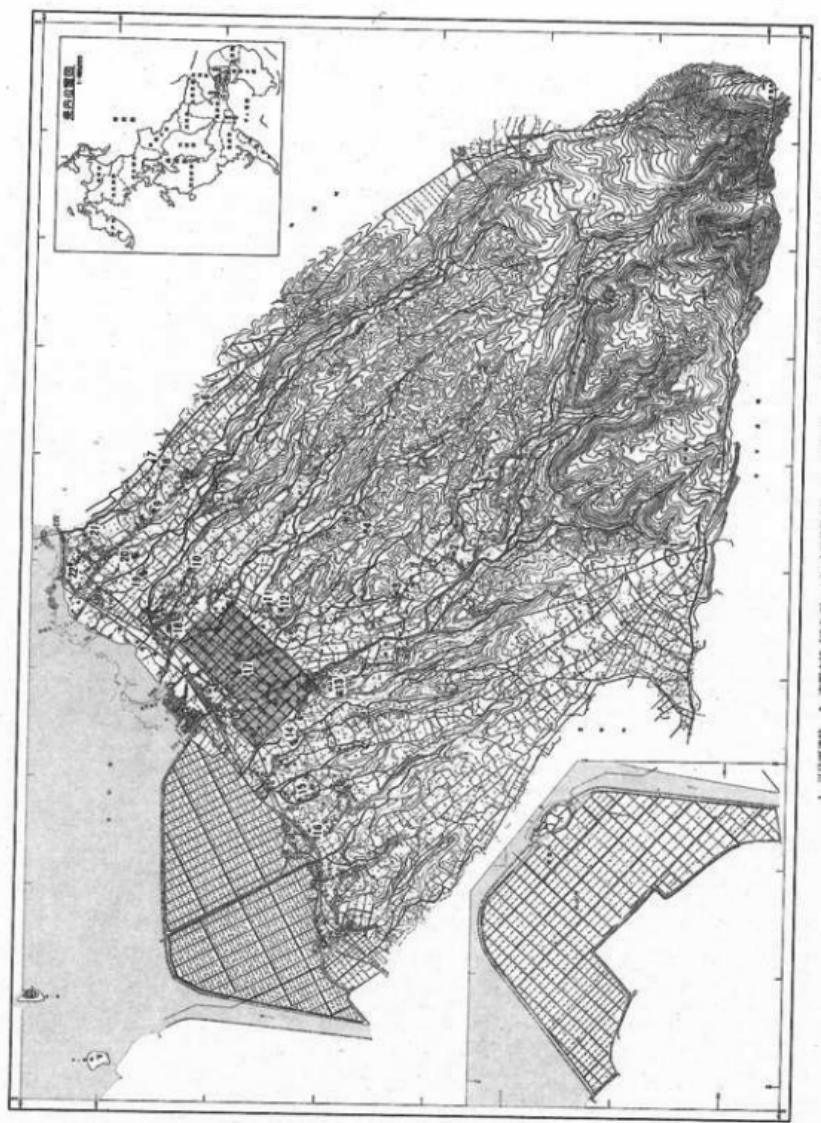


Fig. 2 航空摄影分幅图  
1. 陡崖 2. 断裂带 3. 河流 4. 湖泊 5. 水稻田 6. 下层古地层  
7. 上层古地层 8. 灰化土带 9. 砂质冲积带 10. 砂砾冲积带 11. 砂砾冲积带  
12. 沙丘 13. 沙质冲积带 14. 古风积带 15. 泥炭带 16. 岩溶带 17. 岩溶带  
18. 风积带 19. 大理岩带 20. 变质带 21. 断裂带 22. 钾长石岩带



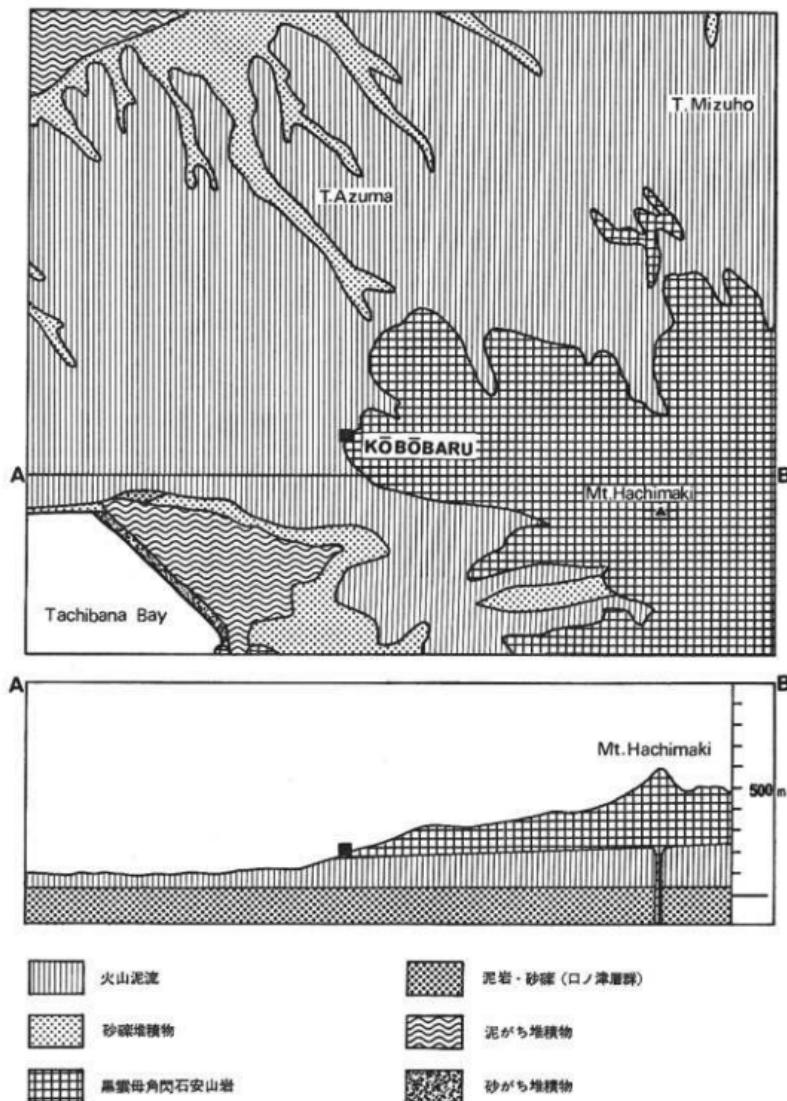


Fig. 3 遺跡附近表層地質図（長崎県土地分類基本調査1973『肥前小浜』より転載）

## 第2章 遺跡の調査

### 一 遺跡の層位 (Fig. 5, PL. 6~10)

土層は基本的に4層に分けられる。

1層は表土で腐植土を多量に含む。暗褐色で厚さは10cm前後である。

2層は黄褐色土。当該地は元々雑木林であった為に伐採時の搅乱による凹凸もあって厚さは10~30cmと地点によって若干異なる。遺物の大部分はこの層からの出土である。なお、出土遺物の時期は、晩期の資料が上面に集中する他は、單一であり安定している。

3層は黒褐色でしまりがなく、西側へ移行するに従って黒味を増す。遺物はこの層からも出土するが、大部分は上部に限定される感がある。厚さは地点によって異なるが、20~40cm程度堆積している。

4層は黄灰色粘質土で、地盤である安山岩の風化礫を含む。遺物は全く出土しない。

調査区の標高は220~224mの間に位置し、その勾配は2度弱である。この内、D区、P1区~R1区の間には大小の安山岩の礫が集中的に堆積している。その流れは、幅15m前後で南北に走るが (Fig. 4), 旧河床ではないかとの教示を受けた。<sup>註1</sup>なお、各土層中より抽出した資料による花粉分析の結果については後述する。

註1 久原巣二氏の教示による

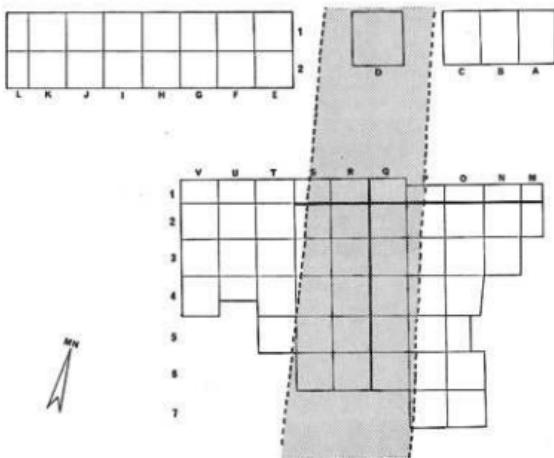
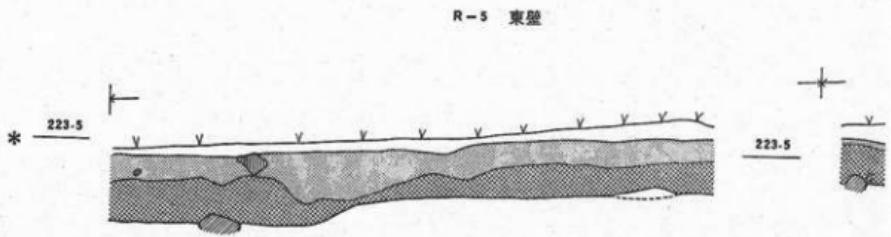
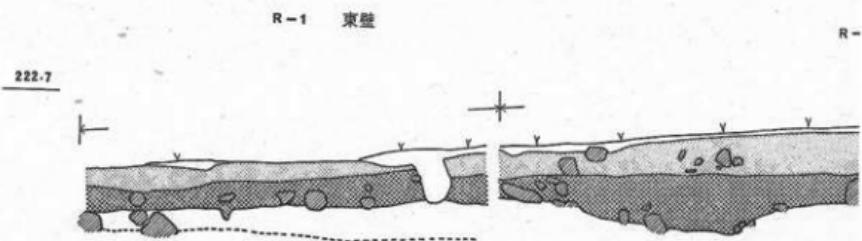
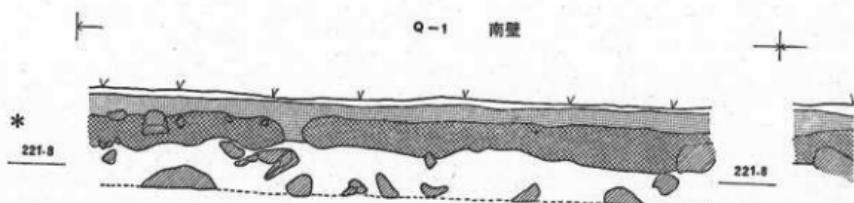
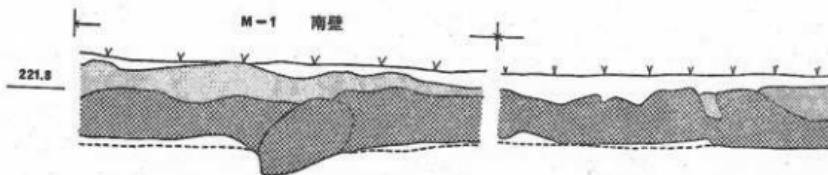


Fig. 4 土層断面位置図





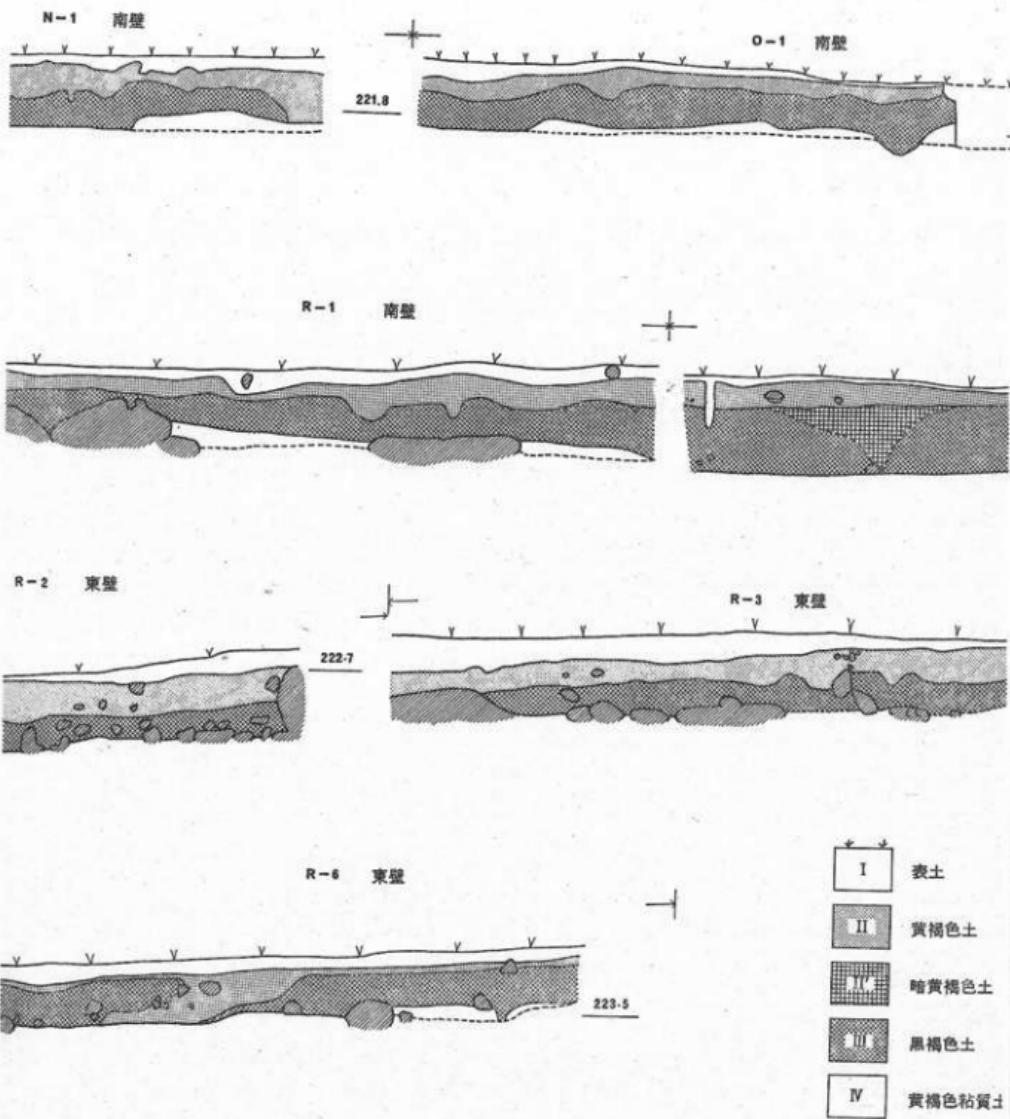
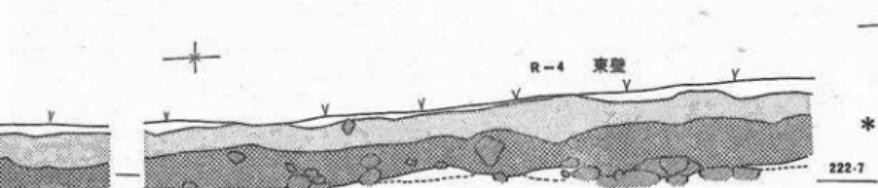
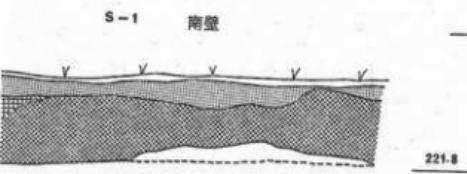


Fig. 5 土 壤 図 (1/40)





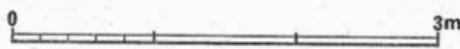
表土

黃褐色土

暗黃褐色土

黑褐色土

黃褐色粘質土





## 二 遺構

遺構は(1)集石・(2)焼土集中部・(3)性格不明ピットなどが確認された。集石状遺構・焼土集中部はⅢ層中あるいはⅣ層上面に認められたがピットはⅢ層掘り込み、あるいは一部Ⅳ層掘り込みが認められた。

### (1) 集石状遺構 (Fig. 6~7, PL. 11~12)

集石状遺構は2基検出された。2基とともに長軸約2m, 短軸1m50cm, 深度30cmを測るもので、どちらも長楕円形を呈する。①はⅣ層掘り込みでⅢ層の黒色土が充填しており、最下部は安山岩礫が露出している状態にある。遺構内から2点の土器片(格子目文)が出土している他の遺物の出土はない。②はQ-6区Ⅱ層上部から掘り込まれ、Ⅲ層上部に安山岩礫が出た段階で最下面に達している。Q-6区周辺はFig. 4に見られるように安山岩礫が浅い面から出土する区域であり、自然礫との関連性也非常に高いが遺構検出時においては周囲に自然礫の出土はなく、自然礫の出土レベルより若干上位に位置することから、一応集石状遺構としての取り扱いを行った。③についても遺物出土の層位の在り方とかなりの相違を見せ、これらの問題はピットの検出状態と対応するもので、ピットとともにこの遺跡の問題として残される。

### (2) 焼土 (Fig. 8)

焼土はC区に2ヶ所、G-1区、P-3区の4ヶ所から検出された。中でもP-3区の焼土範囲は広く他のものより厚い堆積をしており、周辺から多量のカーボンが出土している。又、焼土から西側にかけて土が固くしまった面が見られ、これはC区においても同様の硬質部が確認されたため、焼土とこの硬質部分は密接な関連を持っているものと考えられる。G-1区焼土は長径1m、短径80cmの楕円形を呈し、長軸にあわせ40cm大の礫が1個ずつ並設されていた。焼土はⅡ層下部から検出され、10cm程度の厚さでレンズ状の堆積を見せる。G-1区の焼土がレンズ状堆積であるのに対し、P-3区・C区の焼土はピット状の掘り込み部分に堆積をし、特にP-3区はしみ状に広がりをみせる。焼土と遺物との関連は土器接合状況の中でふれるが、4つの焼土はG-1区で2個の礫を並設する以外は、配石などは行なわれておらず、單に浅い掘り込みで直接火を使用したものであろう。

### (3) 性格不明ピット (Fig. 8)

ピットはⅢ層上面に掘り込まれたⅡ層の黄褐色土が充填しているものと、Ⅳ層上面に掘り込まれⅢ層の黒色土が充填しているものがある。ピットの大きさは30cm~40cm大のものが多く深いもので50cm、浅いものでは10cmぐらいのものまである。ピットの形状はレンズ状のものから柱穴状になるものがあり、それらが無数に広がりを見せたが住居址としての捉え方は困難な状態にあった。ピット及びしみ状遺構などの遺構は多く検出されたものの、他の遺物等との関連からも性格不明な点が多く一応平板での実測のみに終わった。ピット及びしみ状遺構等の成因としては、自然營力としてのみ考えるならば、遺跡中央部を走る安山岩礫との関連が考えら

れ、安山岩礫が出土するのが深くなる遺跡東側にピット検出が少なくなることなどからもその一つの要因として捉えられる。又IV層上面にピットが検出されるということも、遺物出土層位とかなりの相違を見せるため、人為的な要因として捉えることを困難なものとしている。

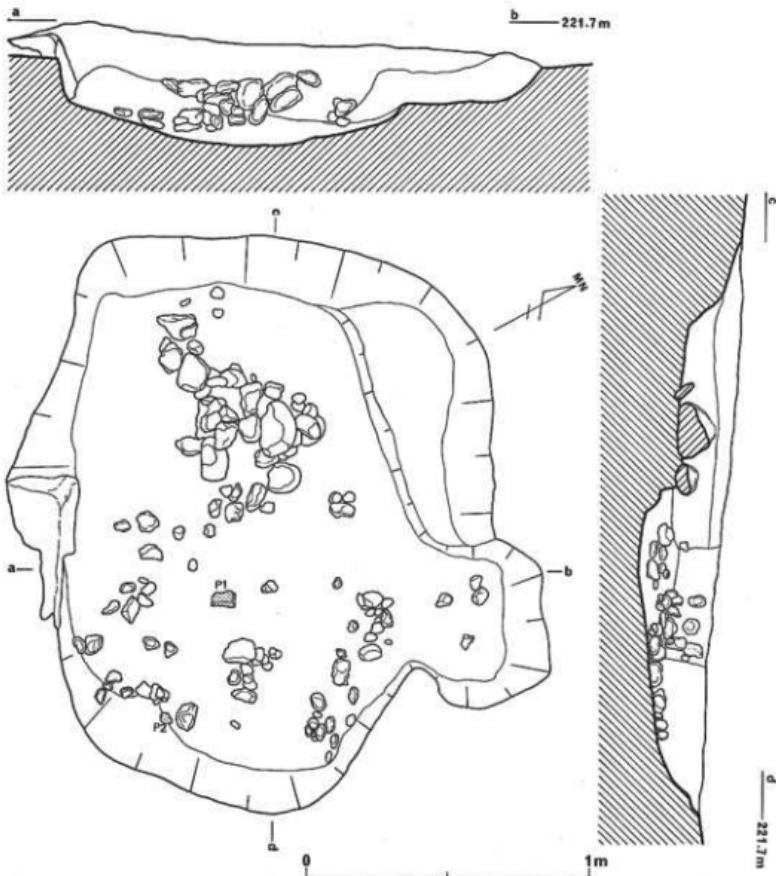


Fig. 6 石集散地①

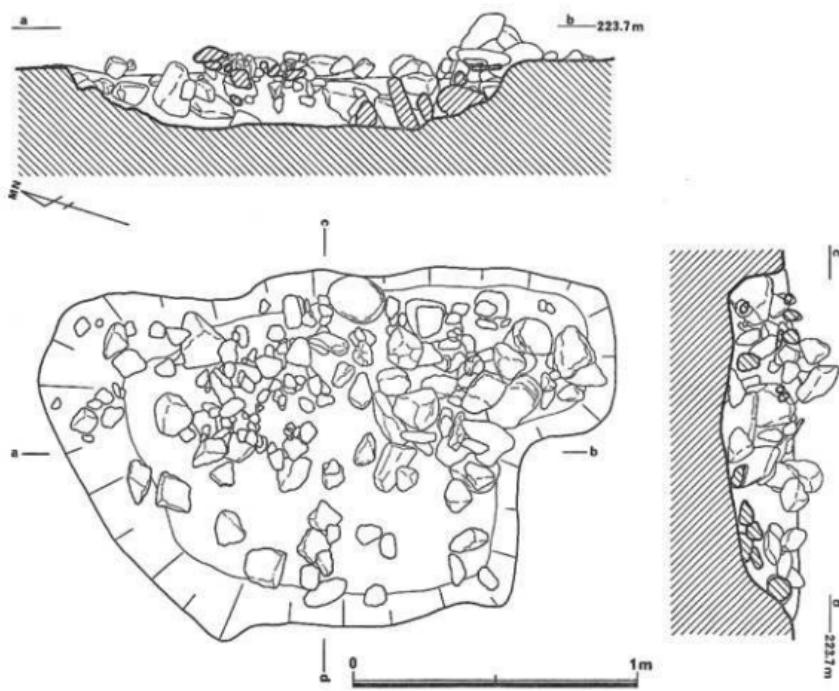


Fig. 7 集石状造構②

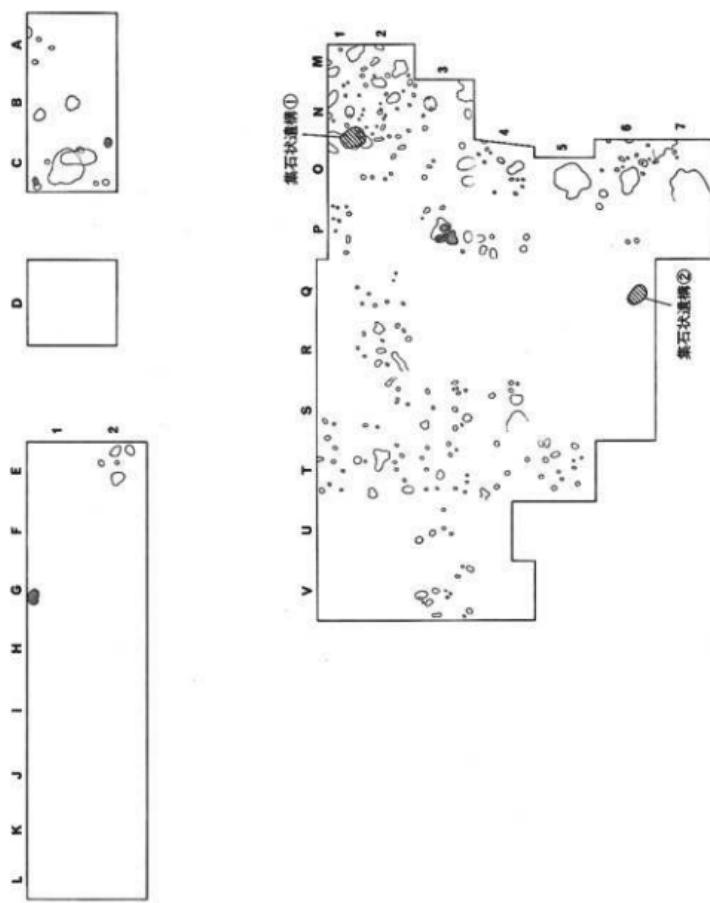


Fig. 8 焼土・ピット位置図

### 三 遺物の出土状況

本遺跡では遺物出土の主体はⅡ層であり、Ⅱ層中あるいはⅢ層上面にその生活面を想定していたが、Ⅲ層中にも遺物が検出されⅡ層・Ⅲ層の遺物に時間差があるのか否かが発掘当初より一つの課題であった。層位中の遺物間の新旧関係は土器の文様構成の変化、形態差、及び層位中の上下関係から検証されるべきであるが、当遺跡出土の押型文土器においては遺物総数の約70%を山形文土器が占め、楕円文、格子目文については5%内外の出土でしかない。楕円文・格子目文については資料数の絶対量が少ないという問題が残るが、土器平面分布の中から各々の出土量が多いグリッドを抽出して、その出土深度を示した(Fig. 9~10)。各グリッドは土層の観察状況から見て南北5mにつき20cm内外の傾斜をもつが、Ⅱ層・Ⅲ層の区別については調査時の観察で台帳に記載されているものを利用し、グラフ中では●をⅡ層、○をⅢ層として1記号につき1点で深度5cmカットで遺物総数を図示してある。又その接合状況をも各個体別(山形・楕円・格子目・晚期土器)に右側に示した。(接合資料は1cmカットで示している)この深度表より当初から予想していたことであるが、一定の深度にピークをもつ正規分布を示した。A区の山形文土器の出土深度を見ると、220.75mから出土し始め、220.60m~220.50mで出土量が急増する。220.60mより下位の出土状況は上位のような急激な減少を示すものではなく緩やかなカーブを描きながら減少するためその遺物深度の核は220.60mにピークを置きながらもそれよりも下位、220.40mまでの間に捉えることが可能であろう。接合資料でも同様な傾向が捉えられ220.50mを中心として接合関係が見られ、山形文土器出土深度の場合と同様な結果を得ることができた。その他のグリッドもほぼ同様な結果を得ているがB区のように全体的に緩いカーブを描くもの、N-2区のように尖鋭になるものなどがあり、接合状態と対比した場合、そこに相関関係があることが理解できる。B区のグラフとN-2区と対比するならば、B区の緩いカーブを描くものに関しては、接合状態もかなりのばらつきを見せるのに対し、N-2区の接合状態ではかなり安定した位置で接合される例が多くなっている。又P-5区では肉眼観察によるⅡ層・Ⅲ層のあり方をグラフ中で見るならば、かなりの動きをもっているようであり、1個体の場合深度も様々の有り方を見せている。P-5区では安山岩礫の影響をいくらかうけているものとの解釈もできよう。しかし全体的に考えると層位的にはⅡ層出土のものが圧倒的に多く正規曲線を描くことより、プライマリーな状況を呈していると判断できよう。又Ⅱ層・Ⅲ層の遺物出土の関係は、グラフ曲線のピークが上部にあり下部に緩やかなカーブを描いていくことから、220.50m内外に核をもつものが下へ沈降したものとして理解でき、その要因としてⅡ層・Ⅲ層の土壤がテフラとの関連性が強い軟質土壤であることが起因するものと考える。このことは諫早市川頭遺跡においても弘法原遺跡と同様な土層状態を呈し、遺物もⅡ層を主体として押型文土器を出土し、Ⅲ層にも稀薄ながら出土しているという。このような現象<sup>註1</sup>は諫早市西輪久道遺跡(中核工業団地)・峰ノ原遺跡<sup>註2</sup>でもⅡ層を早期~前期の土器を主体と

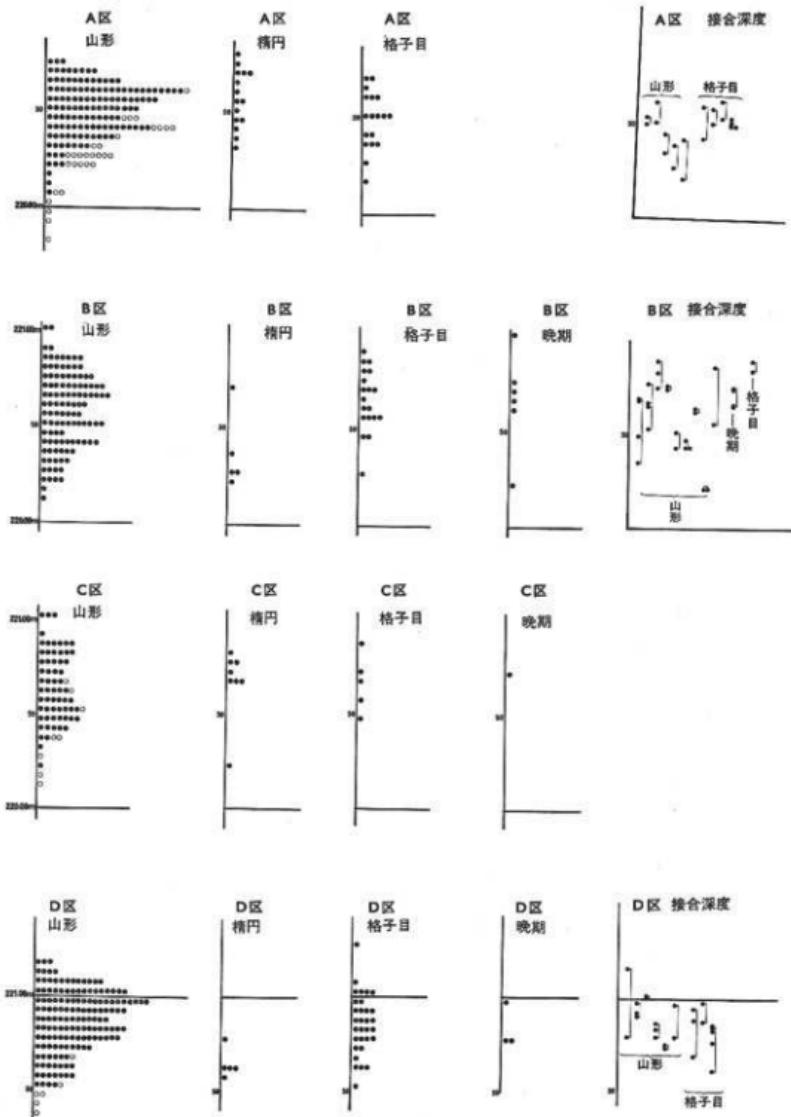


Fig. 9 土器出土深度